べく床に就いた。――斯くして我等が母校に居る友の幻を眺め夢路を彷徨つてゐる時、第二夜の幕も靜かに閉ざされていつた。

夏の中仙道を下る

第五學年　淺島希一

長途の徒歩旅行がして見たくてたまらなかつた僕は中仙道を母の鄕里鏡山村へ向つて八里の道を十七日の朝五時過單身地圖を片手に彦根の地を離れた。

上芹橋を渡る頃まぶしい眞夏の太陽は早輝き始めて、今日も又炎熱燒くが如き日を思はせた。

沼波を過ぎると早ボタンを外した。郊外の青田は未だ穗は出てゐないがその頭を微に微風にそよがせてゐる。晴れた朝だけにすが〳〵しい朝だ。

此邊は千本村、すぐ大堀だ。此處で道は中仙道に合する。

並木道を暫く行くと高宮町だ。もう殆ど起きてゐた。一軒の小間物屋で齒磨を需めて高宮におさらばし、高宮橋を渡る。古い橋だ。此の附近は演習の好適地。秋になるとよく此處へ演習に來たものだ。

籔を拔けて河瀨村に入り、法士を經て葛籠町に來ると、村の人々が豐鄕の方が火事だと云つて話し合つてゐた。

道はさして惡くないが凹凸があつて幅も狹く國道にしては甚だ貧弱だ。

更に並木道を下つて出町を出るともう噂の豐鄕村だ。

四十九院――細長い部落だ。道で古川君に會つた。村岸君の家の前を通つて更に南へ。村外れで道の左側に立派な石造の建物を見る。之が村として縣下一を誇る村役場兼公會堂だ大きさは小さいが見た所では彦根のより立派だ。

石畑を出ると犬上郡最南端の八目だ。尋常六年の折の對抗演習にわざ〳〵下つて來た所だ。火事らしい樣子は全然ない。

愛知郡日枝村高野瀨へ何時入るともなく入つて四谷、上、下枝を經て改修中の宇曾川に掛る。此の下流が名高い櫻の名所だ。

之より愛知川町。字石橋、沓掛、中宿、愛知川と――愛知川は細長い町だ。役場學校の邊は流石に賑かで西洋造の銀行支店等も並んでゐる。思つたより賑かだ。町の中程で田中君

に會つた。

御幸橋のたもとの杉の下で始めて休憩。左側を近鐵の電車が通つてゐる。

ゲートルと上衣を脫いで身輕になり、十分後出立。

之が名高い御幸橋、橋の下に「御幸公園」の札が立つて居る。河は名立たる縣下の長流。野洲川と比肩してゐる。この橋でさへ此の前の出水には危なかつたとの事だ。

煉瓦を敷きつめた坦々たる長橋。たもとに各々二個の電燈がついてゐる。左に近く近鐵の鐵橋が見えるが、本線の鐵橋は見えない。神崎、愛知兩郡の境が此の橋だ。

次は近江商人の本場五箇莊村だ。右が能登川驛への道。左が中仙道。一寸行くと魔の小幡踏切だ。

思ひ出せば過ぐる十一日の朝一朝にして四つの尊い生命を亡つた踏切だ。今はもう何もその跡らしいものはなく、たゞ電線で一寸遮斷してあるだけで番小屋には新聞に載つた踏切番らしい女の人が行んでゐた。

當時の新聞にも載つてゐた如く成程見透しがきかない。がそれにしても近鐵がなぜ中仙道を二度までも橫斷せねばならぬ樣な線路の敷設をしたものか？　不思議だ。

五箇莊は愛知川に比すれば淋しい處だ。小幡、龍田と經て旭村三俣に入り、北町屋、石塚を出ると道は非常に險惡になり、遂に蒲生郡老蘇村へ入つて愈々惡くなつて仕舞つた。

後になつて聞いた話だが此の道のひどいのは電話線を埋設してその上に砂利を敷いたからとの事だつた。

產業道路としての中仙道は自動車の往來繁くその爲此のぶか〳〵道は大きな山や谷が出來てしまつたのだ。車の跡は深く谷を穿ち、眞中は高くなつてゐる。その上砂利といつても町の中へ敷くのと違つて大きな石がごろ〳〵してゐるやつだ。

之から馬淵村までの三ケ村は全く河原を歩いてゐる樣なものだつた。全くひどい國道ではある。

清水鼻を過ぎて野中道を東老蘇へ。清水鼻の神社で流るゝ清水を掬ひて飲み、遠き昔、數多の旅人が喉を濕した當時の有樣を懷ふ。眞に此の邊は情趣深き處だ。

東老蘇には名高い鎌宮即ち奧石神社、西老蘇には鎌若宮神社があり、その鬱蒼たる森は所謂老蘇杜として世に名高い。

若宮で休憩して水を貰ひ、今度はゲートルをつけて出發。

未だ十時頃だらうが太陽はカン〳〵照りつけて全く汗だくだ。豐鄕村邊りから續いて來た人家も五箇莊で切れて仕舞つ

て野中道が多くなり、悪道の爲人通少く何だか淋しさを覺える。蟬の聲が何だかから胸に滲み込む樣な氣がする。

武佐村西生來を經て武佐、長光寺に到る。此處で八風街道が合する。

武佐は廣いが淋しい處だ。村外れにある八日市鐵道の武佐驛の憐れさ！　がやがて此の鐵道にも黎明は訪れてガソリンカーが通ずる筈だ。乘客が十人許り待つてゐた。驛近くの店で梨を買ふ一個七錢——高い梨だ。時計を見ると正に十時半だつた。割合に早く來たものだ。

西宿を出て暫く行つて休憩。人通りは全くない。陽は相變らずのカンカン照りだ。道側に腰掛けて梨を食つてゐると農夫が二人刈り取つた草を擔いで何處からともなく出て來て、又何處へともなく畔道に隱れて仕舞つた。

字六枚橋（馬淵村）で八幡街道に合する。凸凹の國道たる中仙道を思ふと、此の平々坦々たる三間幅の縣道が羨しい。中仙道は二間しかないのだ。

六枚橋、千僧供、東横關と經て日野川に架した横關橋を渡ると我が目的地への道は之より中仙道と分れて平坦なる一間幅の良道となる。分岐點の樹の下に暫し憩ひ、やつと得た良道に蘇生の思ひをしながらすき腹を抱へて西川へ。此處を出ると右手に鏡山が望まれる。何か傳說でもありさうな山だ。

一寸伊吹に似たなだらかな小山だ。

須惠を出ると向ふに學校や人家が立ち並んでゐるのがよく分る。右手が七里、左が鵜川の部落だ。

忠魂碑や奉安庫が並んだ新築二階建の學校の横を過ぎて目的の伯父さん方へ著いたのは暑い最中の一時間近であつた。

阿蘇に登る

第五學年　種村捨三

汽車は阿蘇の裾野をあへぎ〳〵廻旋しつゝ、標高一千米餘りの坊中驛に吾等をはき出した。手荷物を驛近くの茶屋に預けて、輕裝して愈々出發の途に著く。初めの間は散步道を行く樣に非常に樂であつた。殿を受け給はつて登る。中腹に到る迄は綠したゝる若葉茂りの三笠山のやうなのが幾重も重つてゐる。肥馬は其の間悠々草を食み天空にいなないて居るのを見るにつけても、十勝の平原の放牧の樣を想見し、彼等の

生活の幸福な事を羨やまずには居られない。又吾等の疲勞を慰めてくれるものは、彼等の純な姿と郭公の鳴聲と。

やうやく中腹にたどりついて頭を回らせば、取りめぐる外輪山は略々一直線に青い輪郭をくつきりと天空に現はして、火口丘を抱いて安らかに眠つてゐる。案內の人からの舊火口の狀態の說明に依れば、東西の直徑四里、南北六里、吾等の極めようとする中岳は丁度其の十文字の交點にあつて、爆發前は富士山の二層倍の高さであつたらうと學者は說くさうだ。火口原には約五萬人の住民が居て、水田も畠もある。外輪山を背景に水田がきら〳〵日に輝き、人家田園が其の間に溶け込んでゐる樣は、正に一幅の油繪其のものである。

茶屋の飲料水で汗を沈ませて又後れ勝ちの足を引きずる。これからは草も生えぬ岩山で、其處に火口灰が昨日の雨で濕つぽく堆積してゐる。重複する岩根をよぢ、曲折して乘り超へ〳〵ると、火口迄二粁の指標が吾等の足を自然に運ばせる。もう火口は眉睫に迫つてゐる。再び頂上近くの茶屋で小憩して愈々絕頂を極める事になつた。火山灰許りになつた其の間から、巨岩が處々に物憂げな顏を地表に表はして、迎へては送る沙漠もこんなだらうと思はれた。鳴動が聞え噴煙が見えた。もはや踏む足も空である。案內人は早や火口に留まつてゐる。おくればせに火口を覗き込んだ。

其の瞬間！

其の瞬間！

あつ！　驚！　驚！

直下幾十丈天に沖する濛々たる白煙と、地軸をひしげて轟々と響く音響と共に噴き上げらたる赤熱の熔岩だ。覗き見る身は目眩み氣も奪はれん許りである。一瞬又一秒其の狀態が變化百出する。雄大豪壯の數語を連ねたとて、到底其の實狀を言ひ表はせやうか。

其の響の中に私は或るものを考へさせられた。それは大自然の暗示そのものであつた。大自然と足並を揃へて步まうとする人間の淺はかな力を怒る如實の姿なのだ。どうして自然の威力に比べる事が出來やうか。早く現世の苦しみを捨てゝ永遠無窮の眠りに就けと、絕叫してゐるとは厭世悲觀者だ。彼等は當然早く大自然の懷に抱かれて、未來永劫覺めない眠に就く事を欲してゐるのだらう。

人間の果敢なさを知つた事が、此の登山の得る處だとは決して思はない。神秘限りない山靈、それは人事を脫せしめ、

天眞爛漫の氣を培ふ。茫漠果しない廣野は、雄大の氣を起させ活快の氣を養ふ。轟々たる鳴動それは沈勇を養ひ膽力を練る。一草一石皆研究の種でないものはない。山嶽は人生の搖籠であり慈母である。

阿蘇よ。噴火よ。永遠の眠りを續けよ。

山へ登る

第五學年　田中逸雄

時將に午後十一時半。明晩頃は滿月だらうと思はれる殆ど丸い。明皓々たる月は清く澄みきつた中天に高く、下界へ淡い光を落して居る。伊吹山は月の光に照されて夜の空にくつきりと浮き出て居る。

「そろ〳〵出かけ樣か」「ウンもう行かう」と友人達十餘名と共に伊吹山征服の第一歩をふみ出した。

一合目。二合目。三合目。登れば登る程山が高くなつてくる。「變だなあ?」と思つたが、何の事ない屏風の如き山の根本に近ずくからだ。それでだん〳〵見上げねば峰が視界に入らない樣になつたにすぎないのであつた。

歩いて居る間にはズン〳〵外の人達を追ひ越してゆく。草原に寢ころんで休んで居る間に今拔いた計りの人達が先に行つてしまふ。暫くの休息の後進軍すれば、同じ人達に三度顏を合すのも面白い。始めての人々に出合へば誰かゞ「今晩は」と挨拶する。と次の者は待つて居ましたと許りに「お早う」と聲をかけると向ふでは「もう『今晩は』ではなくつて『お早う』かなあ」と如何にも感心した樣子。寂として夜の空氣を破つて一しきり笑の花が咲く。休んだらキツト電燈をともして花を探す一風變つた人も居た。變てこな浪花節をうなり出す人。草笛を吹く人。皆んな未だ大きい子供にすぎないのだなあと思つた。

四合目。五合目。傾斜は次第に急になつてくる。もう無駄口一つ利く者もない。否もう聲を出すだけの力がないのだ。默々として登つて行くくたびれきつた面にも「こんな山位は登らずにおくもんか!!」と言ふ意氣は顏中に充分現れて居る。

何故こんな山が有るのだらう。無かつたら登らんでも良いだらうにと思はずには居られなかつた。

六合目。七合目。八合目。茶屋の亭主が頻りに客を呼ぶ。

一向誰もとりあつてくれない。ねむさうなアクビを一つ爆發させた。

道は次第に險惡になつて來た。目指す絕頂は眼前にせまつた。足の活動はダン〳〵鈍つてくる。翼有らば飛びたいとは此の事だらう。

ラストの健歩。つひに頂上の茶亭に腰をすへた。「嗚呼死んでしまふ位だ」とさゝやいたのを聞いて、矢張り僕もその仲間だなあ!! と思はず苦笑した。時將に午前四時。

五時十分。旭を拜す。嗚呼如何許りあまり立派な日の出とは言ひ難い。雲!! 雲!! 雲!! なんと殘酷な雲だらう。恨を呑む。

午前六時。サラバ。折角登つた山だけれど花を手折りつゝ靜に歸途に就く。

旭はすでにまばゆい迄に光を下界に一パイ投げて居た。

敦賀兵營宿泊の日

第五學年　西崎勝之助

「おい!おい藤本!」「うゝん」「おい不寢番だぞ」

「何時だい」「三時半に七分前だ、早くせひよ」

鼾があたりの空間にはびこつてゐる。他室は暗い、我等の室のみ電燈はともされてゐる。美麗に整頓されて並んでゐる銃がすごく光つてゐる。他室は何んにも見えない。

兵營最初の夜は明けんとしてゐる、第一日は過ぎた。

電燈は消された、再びあたりは鼾のみ。

ガタガタ、聞きなれぬ音に僕は眼を覺した、隣の藤本一等卒はもう起きて上衣を着てゐられた。驚いて飛んで起きた。起床のラッパの餘韻が營内に擴つて消えて行つた。

五時半——二時間僕は何んにも知らずにぐつすり寢込んでゐたのだ。

最初の兵營宿泊、僕は營門をびく〳〵しながら恐しい所と頭の神經をとがらせながら入つた。

恐しい所——幼少の時兵隊さんはこはいものと思つてゐた、巡査も恐しい人間だと考へされてゐた。同じ樣な風をした兵隊さんをこはいと考へてゐたのも無理はない。

だが、今此樣な考が頭にこびりついてゐるのは、我れながら異なことだ——そんなことあるはずがない。

「右へ——ならへ」一兵卒の底力ある號令で一列に並んだ。

「番號」「一、二、三」點呼—朝食—掃除—兵營內見學。

「要するに兵士一人前の食費、入浴、その他食物の燃料は總計十九錢五厘でありまして、諸君が後で見らるゝ通りかなり好い物を食つて居ります。一人前の一日のカロリーの量は二千四百カロリーであります。」

どもりどもりの炊事部長の話に、麥飯の匂、副食物の大釜からのむせる樣な香の炊事場を出た。

兵隊さんが言ふ程にも汚い所ではない。

「ウン」「エイ」「ガチヤン」炊事場の裏で鐵製の大きなアレイを上げてゐるものがゐる。

ぞつとする樣な食ひ殘りの芥捨場！　譯のわからぬ、石垣杉垣、風變りの板塀、深く掘つた穴の樣な畠の樣な畦のある砂地、傾斜の急な石の土堤等々——ラツパ練習の音響止めと思つてゐた。

晝飯——大分美味くなつた。午後一時練兵場に向つた。長い草の爲に歩るけやしない。おまけにでかい蝮蛇があばれられた。兵器見學—炊事——一等卒君の御指導だが僕等は何んにも手をつけなかつた。

夜間演習——最初の夜間演習だ、夕立に降られて夜氣の爲に寒むかつた。空砲二發に皆んな不腹だつたが。

「小隊は此處の樣な所を選んで此の門際出口の所に銃前哨を置き、萬一敵の斥候が歩哨線を通過して近くに來ないとも限らない。それであるから小隊長は銃前哨に特別守則をさずけて上官だらうが下士だらうがかまはず歩哨と同じく前方を監察し、此の途を出入する者の通過に關して停止せしめて取調べなければならない。又前方の異變は細大もらさず小隊長に通知しなければならない。又小隊長は殘りの分隊を萬一敵襲に對して此の門前の道の右に二分隊左に三分隊が出て應ずべきで、小隊長は此樣ないゝ地形をとくと細大もらさず調べ上げていざといふときに、すぐ應ずる樣にすべきである、、、、、、、、、、、、、」「一等卒の御說が細大もらさず」五六度話されたことだけ記憶してゐる。

突擊——夜襲、練兵場の端から端まで走つて、結局空砲一發も打てずに終つた。

おまけに靴の半皮が取れかゝつた。

九時過ぎ、封筒狀の寢床に入つた。

第五學年修學旅行記

目加田榮藏

第一日

旅！旅！

この聲を聽くとき夢の如き觸感が我々の心を躍らすだらう。陶然として天地自然の懷に眠る。全てのものから絕緣された旅！旅は未知だ。テラ、インコグニタにさまよふのだ。

美くしい谷川や、海や山が何時パツと自分の眼前に展開されるかも知れない。さうだ開かれない秘密の書物だ。さう思ふと、ぞく〳〵する樣な好奇心が、デリスシアスロングオブセンセイションが我々の胸中にあふれるではないか。

日暮々々に堤に立つて、輕やかな汽車のエンジンの音に心をそゝのかされあの少しく哀調を帶びた笛の音に、何度遠い〳〵國を想像した事だらう。

毎日々々の平凡な、無聊な牢屋から、朝日の射す春の野に出る樣な氣持で、我々のだるんだ瞳孔の中に、新らしい天地の姿をそして喜びを思ひ切り吸ひ込むのだ。

美はしい數々の聯想それ等が、私を何處かへ誘ひ行く。私は何かにでも、陶醉したかの樣にその中を泳ぎまはるのだ。

六月二日、午後六時半。

汽車に乘つた。それが喜しいのか何だかわからなかつた。だが、こんな場合我々は或る心理狀態の作用か何か知らぬが無理に全然反對の氣持と云ふ樣なものを、見付け出さうとするものだ。

そして、强ひてそれを探し出さうとする。きつと何處かに喜びでない物があるだらうと……。

さうすると又反對の心が喜び！　喜び！と勝鬨を擧げる。私はその力に一度にペシヤンコにさせられて、さうだ！　喜びだ！　と叫ぶのだつた。

名殘の湖面が、夕方近くの日に光つた。

京都で乘換へた。いよ〳〵夜汽車だ。

我々がよく宵に、眞赤に光をともして走り過ぎる夜汽車を見るだらう。そして我々はその度に、何んとも云へぬ憧憬に何んだか、さみしくなるものだ。

ゴトン〳〵といふ度に、紫の煙がゆらいでいよ〳〵夜汽車の氣分を濃厚にする。

雜談！　笑ひさゞめく聲！

大阪に着いた。電氣サインがなつかしい。

神戸を過ぎてからは、もう眞暗だ。

汽車は今、全身に喜びをひし〳〵といだいて、しのびやかに暗の中を走つてゐるのだ。

第二日

三日朝！

初夏の朝日が車窓からさし込んで來る。私達は又新らしい旅の喜びを自覺し始めた。

旅は人間最上の樂しみの一つだ。殊に旅は夏のものだと思つた。

地上の萬象が、それつ！　と朝の身ごしらへを始める、綠々！　それが喜びを噴出する。

初めて見る瀨戸內海。朝餉の煙が向ふの島の家々から、ほの白い煙を夢の樣に立てる。尾道の町が、まだ電氣の影を水にたゞよはしてゐる。時々家々の間から白帆が見える、鹽田も出る。驛を過ぎる頃、東の空には無數のちぎれ雲が黃紫に光つてゐた。海の面も白くなつた。遠く近く、大きく小さく、島々は綠に蔽はれて到る所に朝の力は躍動し始めた。

この海の色は何うだ。

この空の色は何うだ。

朝だ。〳〵。朝なのだ。

我等は今旅の途上にある。かう思ふと、よけいにたまらない樣な氣がして來た。

宮島へ着いた。八時過ぎ。すぐ嚴島へ船で行く。

廻廊をまはると、大鳥居の下へ行つた。ちようど汐が鳥居の所まで來て、歩くと、穴があく。それが又何かよい運にでもめぐり合はした樣な氣がする。又船でもどる。

此處は、むしろその場所で遊ぶより、かうやつて手すりによりかゝりながら、眺めた方がよい樣だ。この島の山と、お宮の美くしさ。もつと〳〵この船の上に、眺めてゐたかつた。だが又汽車に乘ると、やはり元の安樂さに歸つた。

屋根の赤い家が方々にある。この邊の粘土から作るのだらう。所々の海！　それ等を茫然と見る心。

下關に着いた。四時過ぎ。

さあ！　海だぞ！

汽車を降りると、すぐ其處が船の乘り場になつてゐる。どや〳〵と船に乘り込む。サバーサザーと舷に當る波のさわめ

き。それが輕い旋律となつて、あのオーバーザウエーブスのワルツを我々の心に、かなでさす。船が動き出した。大きな船や小さな船がしきりに行きゝしてゐる。愉快だな——。

門司も、下關も、灰色にうすぼけてゐる。

たくさんの船の煙突や帆、又はマストがいつぱい立ち列んでその後方、に大きなクリーム色の洋館が立つてゐる。

門司に着いた。中々立派な所。もう何處となく南國的である。大きな、うまさうなバナ、を到る處に賣つてゐる。臺灣から來るんだな——。かう思ふと、情緒豐かな南國のこの町が、よけいに懷かし味を帶びて來た。

又汽車に乘るのだ。窓から顏を出して、もう一度見返して見た。午後六時ボンヤリとさつきの洋館が見えた。たくさんの船も見えた。海も灰色だつた。僕等の疲れた目に、それがぴつたりと調和して、大きな魅力を以て胸の中までもしみ込んで來る。

茫然たるかなこの心！

八幡に着いたと思ふ間も無く、一パイ黑い家でうづまつてる中に、ヌーツと入つた。

誰かゞ「人間の作つた藝術品の內で最も罕な、又最も高貴な藝術品は文明である。」と云つた。文明は人間努力の記錄である。そして都會、がその文明の精華のシムボルだ。しかしその貴い藝術品の源泉が、大きな力が、この黑い家々と、その間に眞黑な煙をはきながらつゝ立つてゐる幾本もの煙突の間に生み出されるのだ。

汽車は走り過ぎた。しかし今でも、あの大きな煙突の尖端に噴き出してゐる黑々した煙と、熔鑛爐のあの眞赤な火を忘れようたつて、忘れる事は出來ない。

博多に着いた。すぐに宿に行く。食事をして買物に出た。

博多人形等を買つて、宿に着いた頃は、皆ぐた〳〵であつた。我々は今日の旅の滿足をも感じ得ず、もうそんな力も無く、グツタリと寢込んでしまつた。

だが、旅でかうやつてグツスリねむる。それは又明日の喜びを充分に味ふ事が出來ると云ふものだ。

第三日　　杉橋義郎

あわたゞしく、埃つぽい三日目。

早くから皆が床を離れて騷ぎ出したので、眠を破られた私は、亂雜で、薄汚くつて、息づまる樣な部屋を拔けだして、

廊下に出て見た。外へ首をつき出すと、消え殘りの博多の町の夜氣が西洋剃刀の刄の樣にぢん〳〵頰に觸れた。私は人形の町の黎明の空氣を胸一杯吸ひ込んで、部屋へ戻つて出る用意をした。

最初に訪れたのは東公園。

廣大な公園で、視野の續く限り、滴らんばかりの翠の松原だつた。入るとすぐ左手に武德殿があつた。どつしりした御殿風に現代味をとり入れた莊麗な洋風建築だ。しばらく歩みを進めると、突如、松林を突き破つて、空を壓して屹立してゐる二個の銅像が眼に映つた。一つは歷史に名高い元寇の役當時、身を以て國難に代らんと宣うた龜山上皇の御姿。他の一つは日蓮宗の開祖たる彼の傑僧日蓮の巨大な僧形だつた。私はこの銅像の餘りにも化物染みた巨大な姿に驚くと同時に像下に座し、或は粗末な木の腰掛に腰掛けた人々の姿に奇異の眼を見張つた。彼等は瞑目合掌しつゝ、しきりに題目をとなへ續けてゐた。靑白い若者をさへ混へたこの老婆達の、肺腑を絞る樣な嗄れ聲。嘗つて眼にした事もないこの樣な光景が私には非常に奇異に感じられた。私がぼんやり佇んでそのみすぼらしい狂信者達の勤行の心を奪はれてゐる間に、一行の人達はそこから程近い元寇紀念館に靴の紐を解いてゐた。元寇紀念館には、當時の分捕品の兜や甲冑等が所狹きまでに陳列されてあつた。私たちは一巡それらを見學すると、すぐ箱崎神社へ向つて、この公園を出た。

時間がなかつたので、私たちは、廣い通りのずつと端にきら〳〵光つてゐる海を、箱崎宮の前からながめて、石壘の所々くづれた多々良ケ濱の有樣を頭に浮べ、豫定の西公園も割愛してすぐ電車で宿にとつて返した。

荷物をとりに入つて、私はふと昨夜買ひ求めた博多人形の事を思ひ出して心配になつたので、包みを解いて見たが、別に壞れてもゐなかつたのでほつとして、友達と顏見合せて笑つた。この人形にはそれ以來隨分厄介をかけさせられたが、どうにかかうにか、無事に持つて歸る事が出來た。つまらない土產物一つにも仲々の苦勞が要る。まして泥人形の樣なデリケートなものには、汽車の乘り降りにも痞せる思をしなければならなかつた。

博多を後にしたのは午前九時半を少し過ぎた時分だつた。

まだ旅程の半ばも來ないのに、私達はもう大分汽車に乘り飽きてゐた。皆な默り込んで窓の外をながめたり、ぼんやり

と雜誌に眼を落したりしてゐた。早く起きたせいか、舟を漕いでる人もあつた。でもそれもほんのしばらくだつた。

十時過ぎ、私達は二日市驛に下車して、道を太宰府神社にとつた。荷物を茶店に預けた私達の足は明るくはずんで、躍々と初夏の野道を踏んで行つた。

晴やかなクリーム色の路、點々と群を作つてゐる木立の新綠、周圍に霞んでゐる低い峰の連なり、飽くまで澄み渡つた蒼穹がはるか地平線と接するあたりの淡いぼやけた色合、あらゆるものが初夏を謳歌してゐた。

私達は愉快だつた。嬉しさで胸がふくれて、はち切れさうだつた。併し道があまり長かつたので幾分疲れてしまひ、おまけに道を間違へてしまつた。着いた所は昔の水城の址とか都府樓址とか云ふ所だつた。

少し臺地になつた所だつたので、直ぐ前に廣い往還がずつと太宰府の方へ走つてゐるのが如何にも白つぽく見えた。時々貨物を滿載したトラックが、眞白な砂埃を捲き上げて疾驅して行つた。その向ふの田の間を眞黑に塗つた電車が、スパークし乍ら樹立を縫ふて見えつ隱れつしてゐた。旅客機が一臺、蜂の樣に唸り乍ら頭上はるかを掠めて行つた。そんな物を見てゐる內に、私達はすつかり氣が伸び〳〵して修學旅行に來てゐるんだと云ふ感じを失つて、靑空と健康な田園の空氣に有頂天になつてゐた。それでも、しばらくの後、私達は白つぽい往還のトラックの轍を踏んで太宰府に着いてゐた。

石を敷きつめた參道の眞中に、大きな石の鳥居が道を跨つてゐた。それをくゞつてしばらく行くと、例の寫眞で馴染の深い太鼓橋だつた。大きな桶も見た。私は飛梅とか謂ふのを見たいと思つてゐたのに、とう〳〵見ず仕舞だつた。

一同、私かに在りし日の菅公を偲んでこの物寂びた社を辭し、先刻の黑い電車で二日市に歸り、再び汽車に投じて、今宵の宿泊地なる熊本を目指して旅を續けた。

汽車が熊本に着く少し前から空の具合が變つて來て、咽ぶ樣な細い雨が降り始めて來た。窓硝子の水滴は次第に多くなつて行つて、熊本へ着いた時にはすつかり本降りになつてゐた。私は窓に出來る圓い雨足を見乍ら落込んだつまらない感傷からすつかり脫け切らない內にどや〳〵と、あわたゞしいプラットフォームに下されてしまつた。空は相變らず憂欝だ。私達も同じ樣に憂欝な顏付で、水前寺行の汽車に乘換へた。

水前寺と云ふのは、私の考へてゐたのと違つて、お寺では

なかつた。動物園なんかのある大きな公園だつた。雨が降つてゐたため大急ぎて此處を出た。

熊本。第一印象はあまりいゝものではなかつた。町全体が陰鬱な影に閉されてゐた。丁度雨が降つてゐた爲に、そんな感じがより以上强調されてゐたのかも知れないが。

雨の中でふと行過ぎた女の中に、懷へ子供を入れて兩手に包みと傘を持つた、カンガルーの樣なのが二三人あつた。こんな光景は私たちが想像してゐなかつたものだつた。

雨に叩かれて這々の体で宿に着いたのが夕方、それから熊本城を見學に行く人達もあつたが、雨に臆した私は熊本城を割愛して、宿の湯に入り、旅塵を落して、寛いだ氣持で夕飯を濟ました。

雨が上つたので夜に入つてから、友達と一緒に街に出て見た。成程、百貨店もあつた、市街電車も、輝かしく街燈の連つた街路もあつた、けれども矢張り淋しい陰氣さが町中に漲つてゐた。

私たちは、泌みぐ〳〵と淋しさを味はつて宿に歸つた。そして明日の阿蘇登山に備へるため、充たされない思ひで床についた。

第四日

愈々、阿蘇踏破だ。

連日の寢不足で朝寢坊をして、乘り遲れた人達もあつたが、やつとの事で私達は水前寺發午前六時の汽車に乘り込む事が出來た。この鐵道はつい最近、大分まで連絡のついた九州唯一の横斷線だ。が何しろ田舍の閑散線のことだから、時間的に幾分融通が利いて、私達が息を切らして駈けつけた時にはもう發車時刻も過ぎてゐたらしかつたが、しきりに汽笛を鳴らしてせき立て乍ら待つてゐて呉れた。そしてみんながプラツトフォームを何もない反對側から蝗の樣にデッキに飛び付いて攀登るや否や發車した。今度の旅行でこの時位あわてた事は一度もなかつた。

汽車は朝霧をついて驀進した。阿蘇の外輪山を横切らうとするあたりから、漸く機關車の喘ぎが苦しげになつて來た。右手の車窓からは、火口原を濕し火口瀬となつて外輪山を切り開き肥後平野に注ぐ白川の峽流が眼下に見下せた。谷が次第に足下に沈み、溪流が次第に狹まつてゆくにつれて、我々の汽車は高く登つて行つた。谷を隔てた向側の絶壁に懸つた白銀の小瀑布。綺麗に木立の列んだ山の膚。滿々と水を湛へ

た階段狀の水田。思はず快哉を叫ばされる絶佳の眺めだ。友達の手にしたキヤメラにそれらの自然美や人工美が瞬く間に收められて行つた。外輪山を出外れようとするあたりで我々の汽車は一面の狹霧に包圍されて、眞黑な煤煙を乳色の空氣の中に吐き散し乍ら進んだ。

坊中驛に着くと、水前寺で乘遲れた人達が、一足先に自動車で到着してゐた。暫く茶店で休み、携帶品を預けて登山の途についた。

始めの内は樹木のある普通の山道だつたが、しばらく行くと樹海がぷつゝり途切れて、靑草ばかりの處へ出た。

放牧用の木柵がある。その重い扉を押して柵の中へ一歩踏込んだ私は思はず聲を呑んで驚歎の眼をみはつた。乳房の樣に豐かにむくれ上り、幾重にも重り合つて灰色の山裾を取卷いてゐる靑草の丘の魅力的な曲線。その靑草の丘の頂きに一軒ぽつゝ立つてゐる茶店と日の丸の旗。茶店と茶店をつないで靑い丘の膚にくつきりと畫き出された橙色の登山道。それらを全部足の下に踏まえて、靑空にぬつと聳えてゐる巨大な灰色の火口丘。あまりに壯大な、あまりに雄渾な山の姿に、私はしばらく茫然と立ちすくむ外なかつた。

素足にわらぢを履いた小柄の頑丈さうな案内者の陽に燒けたふくらはぎが燕の樣に身輕く、水の枯れた谷川の岩から岩へ傳つて行く後を、我々の白い上衣と重い泥靴が追ひかけてゐた。

道は相當急だつた。おまけに樹も草もない石ころ道だ。疲れる。退屈する。實際、山の中腹あたりまでゞ私はへたばりさうになつた。案内者の足が早いのと、どこまで登つても頂上が見えないのとですつかり氣を腐らしてしまつてゐた。どうしてこんな所に來たんだらうと、身勝手な愚痴さへ口をついて出た。所が一度、噴火口上に立つた時、こんな愚劣な考は一瞬の間に何處かへけし飛んでしまつて、若々しい歡喜が胸にワク〳〵込み上げて來た。

嗚呼！これは又何と云ふ男性的なながめだ！

轟々と渦卷く黃褐色の噴煙と水蒸氣。擂鉢型の火口の底に煮えくり返つてゐる砂、土、熔岩。周圍一里に餘る火口が眞白な噴煙で埋つてゐた。風の具合でその煙がこちらへ吹きつけて來ると一寸先も見えなくなつて、或々は怖しさで思はず足がすくむ樣だつた。あたり一面の砂礫の表面は濛々と硫化水素を吹き出してゐた。別に何ともないのだけれども、苦し

さうな氣がしたので私はハンカチを口に當てた。

絶頂の噴煙を背景に紀念撮影をし、笠井先生の發聲で一同彦中萬歳を絶叫して下山の途についた。

下りは登り道とは違つた方面から下りた。道が急だけにその早い事〳〵。またゝく間に中腹の茶店についた。途中苦しさうに營々と登つて行く幾組かの小學生や女學生の群に出會つて、先刻の自分を思ひ合せて苦笑を禁じ得なかつた。茶店で一同晝食を喫した。

眼下に展つた火口原は一面の水田で鏡の樣に輝いてゐた。その周りに、頂きを並べた外輪山が暗紫色の屏風の樣に連なつてゐて云ひやうのない程大きな感じを發散してゐた。

例の青草の丘には放飼ひの馬の群があちこちに草を食んでゐた。親馬のそばには必ず一匹か二匹の仔馬が寄り添つてゐた。どの馬もよく肥えて如何にも健康さうだつた。ずーつと麓の方で、五六頭かたまつて、一散に駈けてゐるのもあつた。如何にも伸び〳〵した、美しい情景だつた。骨張つた荷馬車挽きの瘠馬ばかり見慣れてゐる私は限りない嬉しさと愉快さを感じた。麓に着くまでの間、無邪氣な仔馬の愛くるしい瞳に幾度見とれた事だらう。

茶店から、坊中驛までは自由に下山。

愉快だつた。ほんたうに涙の出る程嬉しかつた。これから後一生の間、どんな山に登らうが、この阿蘇で得た程の感激を得られはしないだらう。

午後二時十四分坊中發。阿蘇に別れを告げた私達は、輕いあこがれの心をいだいて、溫泉町別府へと次の行程を急いだ。

飽き〳〵する程汽車に搖られて、午後五時も半ば過ぎた頃大分に着いた。これから電車で別府へ行くのだ。

大分まで來ると、熊本や博多で味はへた九州情緒がすつかりなくなつて、關西殊に大阪文化の具がきつく浸み込んでゐるのが感じられた。

別府。湯の町。何と云ふなつかし味を感じさせる町だつたらう。町は明るかつた、綺麗だつた。しつとりと落着きがあつた。

旅館で夕食を認めてから、自由行動を許されたので街を歩いた。ケーブルカーで町の背後の岡にも登つてみた。そこから見下すと、輝かしく灯のつらなつた街路がきちんと碁盤目に並んでゐて如何にも美しかつた。あちこち歩き廻つて、ぐつたりした身体を宿の薄團のうら淋しいぬくもりに包んで眠

につ　いたのはもう十時も過ぎた頃だつた。

第五日

溫泉町の和やかな朝の空氣がまだすつかり消えきらない午前五時、勇を鼓してはね起きた。皆なぼんやりした顏だ。それでもまだこの旅の最後を期待する一脈の希望の色に輝いてゐた。

別府發五時三十五分。七時三十分中津著。すぐ耶馬溪行の鐵道に乘換へた。十九世紀の遺物かとも怪まれる華やかな色合の、クラシカルな香氣を充分持つた經便鐵道だ。だがそれだけに面白味もあつた。薄汚い子供が、キヤラメルや干菓子を少しばかり入れた箱を首から吊してお客に混つて乘込んでゐた。そして汽車が停車場に停るたびにプラツトフォームに下り立つて驛賣子に早變りするなどと云ふのはこゝでなくては見られない圖だつた。

羅漢寺驛についたのが八時半。徒歩で羅漢寺に到る。

羅漢寺驛で、或は又車窓から眺めた耶馬溪なるものゝあまりに俗つぽい、埃くさい所なのに期待を裏切られた私は、こゝでも又すつかり幻滅を感じさせられた。旅行の始から寸つと持續けて來た耶馬溪に對するあまりに美しすぎた私のイリュージョンは散々に打壞されてしまつたのだつた。

羅漢寺などと云ふのも、あまりに奇を衒ひ過ぎたかの感があつた。普通の山道があるのに岩に穴をうがつたて鎖を付けてそれを攀登らせたり、わづかばかりの洞窟の中を暗くして、わざと奥深かさうに見せたりしてあるのや、小僧が大きな聲で說明したりするのが何だかこの寺の風格や、神聖さを落し汚してゐる樣に思はれた。もつと靜かな、もつと非見世物的な羅漢寺を頭に畫いた來た我々は全く失望した。

麓の茶店で一同晝食を攝り、直ちに徒歩で青の洞門に向つた。そして此處でも、私は期待を裏切られた。名高い青の洞門大して長いものでもなく、平凡な普通の隧道だつた。

阿蘇の雄大さに觸れて來た我々の眼を、そして心を、驚嘆させるべく耶馬溪はあまりに貧弱だつた。あまりにこせ〳〵しすぎてゐた。

洞門驛發午後一時三十五分。再び愛すべき汽車に投じて、長閑な車窓から單調な田園を見やりつゝ中津著。こゝで一時間許り待つて、省線で別府にとつて返し、驛前から四臺の遊覽バスに分乘して地獄めぐりに向つた。時に午後四時半。

先づ自動車は一散に街を駈け拔けて郊外に出た。私の乘つ

たのが一番先登だつた。街を出はづれると女車掌の沿道說明が始められた。朗らかな聲。窓外を走る佳景の數々。皆な一樣に好奇の眼を見張り、耳を欹てゝゐた。

自動車は次第に高みへはせ上つて行つた。綺麗な街が、海が、そして綠野が車窓はるかに展開して行つた。道も車も申分がなかつた。ウツトリとしてゐる間に着いたのが八幡地獄。一同下車見學。板圍ひの中に小さな池があつてその奥の方から濛々と白い湯氣が噴き出してゐた。池の眞中に鐵棒を突立て、頑張つてゐる鬼の口からも盛に湯氣を吹き出してゐた。

次に着いたのが坊主地獄。相當の大きさの泥池の表面に、底の方から湧き上つて來た無數の粘土色の氣泡が漂つてゐて丁度坊主の頭そつくりだつた。坊主地獄と云ふ名がぴつたり感じにはまる。その奥の方にも一つ最近熱湯が湧出した所があつて、これも何とか地獄と名でも付けて人を呼ぶのだらう、人夫が數人地均しをやつてゐた。こゝで絞り染のタオルを買求める。

再び自動車に乘ん込んで海地獄に着いた。その地獄は別府の數ある地獄の内でも最大のものなのださうだつた。大きな池の水が凄い程青くて、而も熱湯だ。温泉に湯を送るため、數本のパイプが池から出て山裾へ走つてゐた。

最後が血ノ池地獄。名の通り池の熱湯が全く朱色をしてゐた。前の海地獄に較べて雲泥の相違だ。說明者が居て、池の中に投げ込んだ竿を上げては見物人に觸はらせてゐた。私も一寸ふれて見た。相當の熱さだつた。池の水から作つた藥を賣つてゐる男もゐた。これをつけるとニキビなんか直ぐなほつてしまひます、など云つてゝゐたが、その男の顏がニキビだらけだつたのは一寸皮肉だつた。

地獄めぐりを終つて、山を馳せ下りる自動車の壯快さ。

山麓から別府まで數哩の道は、海岸に沿つた坦々たる鋪裝道路だつた。左手には、伊太利のナポリの海に較べられると云ふ別府灣が明るい六月の光を浴びて燦々と輝き、右手はるかにのしかゝる樣な鶴見岳が碧空に聳え立ち、その麓には日本一のコンクリートの大佛が眞白に光つてゐた。

痛快なドライヴ數分。我々は再び懷しい湯の町に歸りついた。

宿で夕食をとつて、再び街に出る。

夜の別府の街は何度見ても綺麗だつた。海岸へ出て見ると今夜我々が乘船する綠丸が温泉地通ひらしい、華やかに塗ら

れた船体を暗い水の上に靜かに浮べてゐた。心合つた友達と肩を並べて防波堤に腰を下して眺めたこの街の夜景の印象。私達百餘の白い小倉服の内、幾分なりとも感傷に陷込まなかつた人が果してどれだけあつた事か。

若い私達にとつて、夜の別府は本當に懷しさと親しさを感じさせて吳れた所だつた。海岸に並んだ旅館の何層もの窓硝子の華やかな光が水の面に搖れる風情や、さては海のはるか向ふにポツ、リ灯つた赤い燈臺の灯のまたゝきは、海でなくては味はれない私達の歡喜だつた。

これでお別れなのだ。かう思ふと、この旅行を終る事が、我々の中學時代から、そして我々の若さから別れて行くんだと云ふ氣がした。

八時に宿に集つて、宿の人々の見送りで私達は船に乘り込んだ。見送る人と船出する人達との間に色とり〴〵のテープが幾筋も張られた。私達はみんな舷に出て、昂奮した顏付で最後の別府に別れを告げた。

、、どらが鳴つた。離れるのだ。別れるのだ。スクリウの響が身体に傳はつて來ると、見送り人で一杯になつた棧橋がもう動きはじめてゐた。テープがさや〳〵とふれ合ひ乍ら伸びて行つた。もつれ合つたテープが切れた。そして舷に、手摺に無數にまつはり付いて、ひら〳〵と夜風にはためいてゐた。

棧橋が、街が、灯がだん〳〵遠のいてとう〳〵見えなくなつてしまふまで、私は薄暗いとものの手摺にもたれてじつとそれを見つめてゐた。無數の灯の圍りが次第に小さくなつて小さな點になつてしまふと、たまらない哀愁が胸に込み上げて來た。下を見ると、足下から無數の泡が湧き立つて來て、船の航跡が眞黑な海の中にぐん〳〵伸びて行つた。

灯も見えなくなつた。船は尙東へ〳〵と闇を縫うて進んでゐた。

第六日

朝だ。船は爽やかな海風をついて相變らず東へ向つて白い航跡を引いてゐた。

私達はみんな上甲板に出て、ポートや煙突の間をぐる〳〵歩き廻つた。船の旅。私達の感情は愉快を通り越してゐた。

正午少し前、船は兒島半島を左に望みつゝ、高松の港に入つた。高松。繪の樣な綺麗な港だつた。

神戸に着いたのが午後二時三十分。

三ノ宮から汽車に乘ると、俄に氣が弛んでしまつたのか、

私は疲れを覺えてグツタリとなつた。五日前こゝを通る時には盛に饒舌をふりまいてゐた人達も、すつかり弱つて、默り込んで窓硝子に頰を押しつけてゐた。

懷しい彦根の街の灯が見えた時、私は矢張り故鄕を慕ふ心をしみ〴〵感じた。

五日間の樂しかつた夢を抱いて、私達は今歸つて來たのだ。歡喜と哀愁の錯雜した思ひ出を胸につゝんで、私達は溫い故鄕に歸つて來たのだ。—(一九三〇、一二、二六再記)—

第四學年修學旅行の記

松宮實
吉原茂
近藤謙次郎

六月三日。

旅行！　旅立ち！

何といふ良い響。何と言ふ樂しみを持つた言葉だらう。考へれば考へる程、自然に嬉しくてたまらなくなる。旅行の嫌ひな人は恐らくあるまい。況んや氣の合うた。仲間同志の修學旅行に於てをやである。

で、僕は嬉しくて〳〵ならないのである。待ちに待ちこがれた旅行は、遂に今日となつた。天氣は日本晴と迄はいかないが、申分ない旅行日和、何か忘れ物をしたような氣にとらはれながら、驛に着くと、皆、既に、にこ〳〵と話合つてゐる。

午前六時五十五分。

未だ、眠りより覺め切らぬ。懷しの彦根に暫しの別れを告げて、汽車は動き出した。

かくして旅の第一歩は踏み出された。

見馴れた湖國の風景は、瞬く内に過ぎ去り、我等を乘せた列車は、濃尾平野をつゝ走る。

名古屋を後にした頃、そろ〳〵退屈し出したが、反對に車中の雜談は、增々脂が乘つてはずみ、哄笑、放歌が隨所に起る。突然我が東京行三八列車は囂々たる音響を立てゝ、鐵橋を渡つた。うと〳〵してゐた自分は、はつと思つて、眼を窓外にやれば、今や濱名湖上を通過してをつた。鐵橋又鐵橋。絕佳の風光。遙かの遠州灘。

清水港を過ぎて、富士山は、斷然よく見え出した。此れは風光明媚な駿河灣と共に、目を樂しませ、汽車に弱い僕には少からぬ助けとなつた。六月もまだ始めであるが、海邊には河童の樣な子供達が泳いでをり、沖には、豆粒程の夥しい漁舟の點在してゐるのが望まれた。其の間、芙蓉峰は雲中に沒し、或は出でて、氣を揉ませた。

午後六時三十二分。

四百餘粁を走破して、藤澤驛着、直に江の島に向ふ。

江の島。此處で電車を捨てゝ、長棧を渡り、二見館に靴の紐を解いた。

食後自由行動。有志と月光を利して、洞窟を探る。地震で犧牲者を出したとか云ふ。遙か遠くには、燈火が點々し、冴えた月光は海波にくだけて銀波となり、突兀たる巖上よりの眺めは、凄く美しい。

あたりも靜まりかへつてゐる。旅は此れからだ。充分睡眠を取らねばならぬと思ひつゝ、床に就いたが、話に花が咲き又蚤の襲擊とで寢られず、眼は愈々冴える。

旅の第一夜は更けて行く。

第二日

朝早く朝食をすませると島の向ふ側へ向つた。しめつぽい朝の潮風がほがらかな感激の豫感を與へる。空は快晴だ。數町の道を行くとぱつと切り開かれた斷崖へ出た。そして明るい相模の海は我々の前に投げ出された！　何と言ふほがらかさだ。灰白色の斷崖にまつ青な朝の海ががぶり〳〵喰ひついてくる。晴れ渡つた初夏の空、直角に山肌をさらけ出してゐる斷崖、大きくうねつてゐる青い海。崖につけられた細い道をつたつて僕達は行く。遠い崖づたひに來る友の白い制服がちら〳〵目につく。野性的な感激が到る所で爆發する。海岸にはずらりと漁船が並んでゐる。相模の朝の海景色——それは明るい水彩畫だつた。赤裸々な自然の肉体の露出だつた。

やがて大きな洞穴の前に出た。薄暗い中の方に燈明がともつてゐて何か祀つてあつた。そこで蠟燭を買つて更に中へ入る。狹い洞穴はつるつると水にぬれて氣味の惡い冷氣を皮膚に感じる。一番奥の端にも又何か祀つてある。洞穴から出た時はほつとした。

島を廻つて旅館の岸迄運んでくれる小船がある。乘らう乘らうと十人位乘り込んだ。稚子が淵の怒濤に船は大きく搖れ

る。「船が搖れるから坐つてゐて下せえまし。」人のよささうな、眞黑な顏をした漁夫が注意する。打ち寄せる大波にうしろからくる小船が隱れさうになる。そゝり立つ斷崖はゆる〳〵と廻轉して行く。太陽は大分強くなつて友達の顏が明るく輝く。打ちつける飛沫が顏に飛び散る。すつかり嬉しくなつた僕達は歡びと笑ひを船の中で爆發させた。船が岸につくと、旅館へ歸つて荷物を受け取り、再び長い長い棧橋を渡つて停車場にむかつた。昨夜も一緒であつた女學生の一隊も停留場前に集合してゐた。何だか懷しい氣持がした。數十分待つて後鎌倉行の電車に乘つて長谷にむかふ。電車は相模の海岸づたひに走る。次第に小さくなつて行く靑い江の島に私は心から感謝した。

長谷へ着くと先づ大佛を拜觀する。古びた靑銅色をして大佛が呑氣に構へてゐる。橫つ腹に穴があいて金二錢で胎內へ入る事が出來る。內部はがらんとした中空のもので、梯子を傳つて上へ登る。頸の後に窓が明いてゐる。ドアつきの便利な窓である。へんな佛さまだ。寺內で小憩後停留場に集合鎌倉へ向ふ。鎌倉の町は豫期以上の明るい活氣のある町である。實朝の殺された例の石段や大銀杏其他賴朝の墓等見物して忘れかゝつた歷史の記憶を想ひ出した。やがて鎌倉驛に集合、プラツトホームに整列して省線電車に乘込む。愈々東京へ向ふのだ。

省線電車は物凄い勢で走り始めた。橫濱を通る頃、窓外は大分都會めいて來た。輕い洋裝の女や男、意匠を凝らしたモダンなカフエーが見える。長く繫いだ省線電車にいくつもすれ違ふ。そして電車は益々スピードを增す。時々本線の列車も追越してしまふ。やがて新橋についた。もう東京だ。長く續くペーブメントを滑るやうに走る自動車。自動車。人。人。そしてアンテナが林のやうに見える。建物が、白金のビルディングがいくつもいくつも見える。眞黑な煙を吐いてゐる煙突も見える。自動車が飛ぶ。電車が飛ぶ。スピードと音響の目まぐるしい風景——それは風景と言ふよりは一つの機械だ。ジヤズだ——の中を電車は遂に東京驛に着いた。「とうきよう。とうきよう。」スピーカーがわめく。ガラリと開けられた出口から私達はどつとプラツトホームに吐き出された。雜音。雜音。車庫が、列車の車庫の屋根が遠く續いてゐる。幅の廣い階段を降りて無我夢中で驛を出た。

（眼前に展開された世界、それは科學のすばらしい結晶だつ

た！物質的な蠱惑の色彩の氾濫だつた。爛熟し切つた「時代」の美しい完成品だつた。）初夏の日射を反射してゐるしろがねの丸ビル。綠の街路樹。そして健康的な女の足。足。人の波。自動車の波。物質と肉体が入亂れた大きな脈動。……

驛前ですぐに遊覽バスに分乘する。附添の女車掌が親切にいち〳〵說明してくれる。櫻田門より入つて宮城を拜み寫眞を撮つた。こゝは丸で遠い所へでも來たやうにしんと靜かだ。これよりいよ〳〵東京見物に出發。

靖國神社
赤坂離宮
神宮外苑　靜かな綺麗な所だつた。
明治神宮　奧深い神秘な感じがした。日に二三組は神前結婚があると云ふ。この頃より昨夜の睡眠不足から居眠りを始める者がある。
乃木神社
泉岳寺
愛宕山放送局　高い高い石段に皆ふらふらになる。褐色白色の建築物が遠く迄見える。遠くの海も見える。
淺草　道路は全く人でうづめつくされてゐる。

人。人。あくどい色彩に染められた町だつた。

かくて一日のあわたゞしい見物に疲れ切つた我々は旅館にたどりつくとほつとした。夕食を食べて後寢轉びながら東京の感想を互に語り合つた。

夜、都會の夜が來た。イルミネイションと街燈とヘツドライトと。都會の夜は光の交錯だ。ヘツドライトに照らし出された人の姿。ショウウインドウの光に赤く染められた人の姿。憂鬱と憤懣とを闇で覆つた赤と靑と黃の光の都會。みたされない人々を闇で覆つた夜の都會。それは疲れ切つた現代人の頭にとつて、ロマンスを結ぶ唯一の慰安であらう。理實をせつなに享樂して行く現代人にとつて、唯一の慰安に相違ない。生活の不安と生活の不滿を紛らすかなしいものに相違ない。疲れ切つた夜の都會は、これらの人々に嬌態をつくつてみせる。光の都會、渦卷く都會は消化不良の現代に生れたピエロなのかもしれない。虛榮の文化を背負つた悲しいピエロなのかもしれない。

上野の附近には事實これらの事を思はせる多くの人を見た。失業とジヤズと、不滿と陶醉と、反抗と享樂と。僕はへんな氣持になつてこの美しい夜の都會をいつ迄も眺めてゐ

た。かすかな旅愁に似た思ひを感じながら。

第三日（六月五日）

何だか騒がしい物音がする。

ザア〳〵〳〵、雨がトタンを打つ音だ。

つまらないあア！　樂しい旅の夢を破つてしまつたにくい雨だ。我等は前夜江之島に於て修學旅行の第一夜を殆ど睡らずに過ごしたので、いやでも熟睡せねばならないのに！

時計を見れば正に午前四時だ。

早速洗面所へ行つて……鏡に映つた自分のねむさうな目、まだホンノリとあたりが明るくなつたばかりだ。

やがて上野ステーションに向ひ、日光行の汽車に乘込んだ。

五時發車、汽車は帝都を後にして北へ、北へと走りつゞけてゐる。段々土地が高くなつて來る。雨はなほも降つて居て氣が晴れない。ぼんやりと霞んで景色が充分眺められない。併し汽車——關東大平野を南から北に向つて走破した我が乘れる汽車は、その疲れた胴体を日光驛構内に横附けにした。多數の乘客を吐き出して身輕になつた汽車は、やがてスルスルとすべり出した。そして雨中に姿を消して行つた。驛前から電車——小さな、狹い、古くさい電車に乘る。それでもどの電車を見ても滿員の盛況だ。

併しその乘心地の悪さと云つたら、實にお話にならない。田舍のガタガタ馬車にも劣る位だ。

暫らくして當夜宿るべき旅館前で停止、一同は荷物などをすつかり預けて、愈々東照宮參拜の途に向ふ。例の電車に搖られながら、次第々々に高くなつて行く。

程なく東照宮に達し、所謂結構な氣分を味はつた。併し雨はなほ止みもやらず降りつゞいて、中には宿へ早く歸らんと云ふ者さへ多かつた。

とにかく案内の人について東照宮の説明を一通り聞いた。「成程！」と感心した樣子をしては居るものゝ聊か退屈を覺えた。

次いで再び電車で、馬返（ウマガヘシ）まで行き、そこから各自中禪寺湖或は天下に名だたる華嚴瀧へと向ふ。自動車を驅る者もあり、徒歩で行く者もある。

ポツ〳〵と幾つもの白いグループを作つて、曲り曲つた坂道——昨夜來の雨で泥だらけになつた坂道を登つて行くのだ他の幾多の學校の生徒等も同じ樣に登つて行く。その中に純白の洋服に身を固めた我が彦中生が一きは異彩を放つてゐる

登り初めてから物の二時間も經つた頃には、もうみんな坂道を踏破して、濃霧の爲めに一間先も見えない中禪寺湖畔に或は飛流直下幾十丈と稱せられてゐる華嚴瀧の落口附近に、それ〴〵姿を現はしてゐた。

中には空腹と疲勞の餘り飲食店へ飛び込んだ者もあつた。我等はボートを深く霧に閉ぢこめられた湖上に浮べて、暫し波のまに〳〵漂うた。全く何が何だか分らぬ位だ。

「もつと天氣がよかつたらなあ—」と天を仰いで嘆息するばかり……。いくら思つてもにくらしいのは此の日の天候だ。併しいつしか下山の途に着いてゐた。

もと來た道をてく〳〵歩く我等中學生！　何れを見ても、何れを見てもふら〳〵に疲れてゐる。まるで綿の樣に、四時過ぎ馬返から再びいやな電車に乘せられて——搖られて——旅館に着いたのは暮色漸く迫る六時さがりだ。

『やれ〳〵』と胸を撫で下して、ホツト一ト息ついた。

夕飯をすまして、暫し街を歩き、九時前後には全部床についた樣だつた。床の中でつら〳〵本日のコースを按ずるに、得たる所は只疲勞のみ。故郷を夢想しつゝ旅の空に眠る。

七日　最後の日

五時過ぎ早くも朝食を終り、三々五々、小雨の中を上野驛に向ふ。

人影も稀な鋪道は、しつとりぬれて、青白い電燈の光と、五日の旅でうす汚れた白服姿を寫して、冷く光つてゐる。

朝の内は、流石の此處帝都も、往來は少ない。絶間無い自動車の動きを、生馬の眼を拔くと言はれる雜踏の内を、せはしく泳ぎ廻はらずとも、街路樹の若葉の茂みを見つゝ横切れる驛で八商生と會ふ。見知り越の顔も、二三あつて懐しい。

五時五十分、省線で東京驛へ。夜も明け離れて、窓外には大小無數のビルヂング、廣告塔が、次々に表れる。

一同は神戸行二九列車に乘り込んで、東京におさらばを告げる。時に午前六時二十五分。長い驛の構内を過ぎ、混み合つた家並のすぐ傍をかすめて、汽車は徐々にスピードを加へた。車中は靜かで騒ぐ者も無く。氣のせいか談話にも、行きの樣な元氣は無い。

何時の間にか雨は霽れ、東海の靈峰富士は、我等を見送るかの如く、雲際遙かに聳え、島田を過ぎても、依然其の神々しい頂を表してゐた。

列車は總てを後にした。山も河も野も町も、皆後へと走つ

た。

かくして進みに進む。

米原を出て始めて、懷しい琵琶湖を宵闇の内に見出し、又金龜城の白壁を木の間隱れに。望みを見た瞬間、懷しさのこみ上げて來るのと、我等の旅行の終りを、つく〴〵感じた。

さうして五日間の記憶が、走馬燈の樣に、駈け巡つた。

莊嚴な宮殿、大建築、富士の靈容、華嚴の瀧、露坐の大佛日光の大自然美、人工美、大東京の喧噪と雜踏と銀座、不潔な空氣、江の島の蚤Etc……

彦根着。暗いプラットフォーム。

午後七時五十五分。

僕等の旅行も終つた。あつけなくも、樂しい一時の夢の如く。

敦賀兵營見學之記

第五學年　大照敏

第一日　昭和五年九月二十六日

秋氣校庭の公孫樹を賑はす絶好の秋日和。吾が彦中四五年二百餘名は午前九時本校々庭を發して意氣揚々と午前八時二十一分彦根驛を發し一路兵營生活への第一歩を急ぐ。

異樣なしかも潑溂たる若人の勇士は車中に物々しい空氣を漲らせ爲に時々「何どすか」見知らぬ人に問はれた程である。

かくて終始雜音の中に午前十一時過ぎ列車は敦賀についた一行は兵營に最も近い粟野驛に行く爲に小濱鐵道に乘換へた之の間四十分。各自飯盒の飯を平げる。驛前に叉銃して三々五々隊伍をといた。學生の兵隊、何事が起るのかと町の人は我々に不審の瞳を注いだ。やがて辨當を濟まし粟野驛にどん〳〵汽車を走らす。この驛から聯隊までは約二十五分かゝつた。先の敦賀驛よりの道程は二里不足ださうだ。

皆思ひ〳〵の想像を畫き色々囁き乍ら輕い足を運ぶ。

セメントの垣だ。「いよ〳〵兵營だなあ」と思つた。隊伍を整へ直しうんと歩調を延しやゝ上せ氣味で營門を潜る。強い手で頭を抑へつけられた感じだ。先づ門の歩哨を見て兵營の所謂婆婆の風が一變して歩兵第十九聯隊の風が瞬間的に吹く。

各學年は營庭に整列して暫く休憩した後各所屬の中隊には入る。この時將に一時半。

兵舍。「一口に云へば兵舍はがんとしててゐる」誰しもかう

感じたことだらう。單調と云へば單調であるし素朴と云へば素朴だ。併し何れもその狀景に適し得たとは認め得ない。

班長は上等兵で「教官殿から出來る丈嚴重に指導せよ」と云はれたと絶えずいはれた。吾々はだまつて顏を見合す。

午後兵器。防毒覆面。機關銃その他について實地狩野少佐殿の御說明があつた。午後四時頃炊事場と傳書鳩とを見學する。「二千人の飯とおかずが七人で出來る。」之には少からず驚嘆した。蒸氣管のぷつ〳〵たつ湯氣大きな飯蒸器辨慶の樣な汁なべ「うんかうなけんならん」と誰も感心させられたらしい。

鳩舍では可憐な小鳥のしかも偉大な力を聞かされて何だか崇高なものに對する感じがした。暫くして中隊に歸ると晩飯の用意は既に調つてゐた。兵營最初の飯を大きなアルミの兵隊特有の臭ひのする食器三つで一同心持ちよく食つた。

各自は食後銘々自分の食器を洗つて自營率先の第一歩を休驗する。大部分の者は夕食後の散歩に前の營庭に出かけて吾が中隊も十六燭の電燈の下に油じんで光つてゐる机ばかりが淋しく列んでゐる。點呼は八時半だ。八時には全部歸つて掃除をし整頓をして點呼を待つ。整然たるベツド。食器。枕。どれも皆氣持ちがよい。點呼は正八時半下士によつて一齊に行はれる。うんと聲をあげて番號をつけ無事點呼を終る。

「狀袋に手紙を入れる樣にベツドには入るべし」との命令そのまゝする〳〵と足からすべり込む。九時の就床消燈ラツパも半分夢と聞き乍ら眠りにつく。あゝ樂しかつた兵營の第一日。

さわぎのこゑもいつしか靜まつて向ふの兵舍の光りが自分のベツドに流れ込んで來る。早皆のかすかな寢息さへ聞える。不審番の足音も近づくらしい。

敦賀兵營日記

第五學年　藤田富男

九月二十七日。

消燈した後の殆んど闇といつてもよい兵營の何處をも取卷いてゐた靜かな曉の空氣は清楚そのものだつた。

兵營の第一夜を明かした吾等の夢も漸く破られようとした時に突然四圍の空氣を震はす劉喨たる喇叭の音。「さあ、起床

だ」前夜班長から教へられた樣に點呼を受けようと吾先にと兵舍前に整列した。僅か半日程の軍隊生活で全く吾等は感化され所謂軍隊氣質が充分に浸込んでしまつた。

生々とした番號の聲。皆の顏は如何にも愉快さうだ。營庭の何處にも「一、二、三」の聲。兵隊達のあの機敏なきび〳〵した動作に今更乍ら愉快さ慕はしさを感じないではをられなかつた點呼終つて吾等は各々班內に歸つて班長の指揮で床揚げ、掃除、それ等が終つて朝食。

家庭で云ふ食事の終つた時と違つて軍隊では炊事場の外にある殘飯入れに殘飯を入れ食器を洗ひ班內を綺麗に掃除した時が本當の食事の終つた時なのださうだ。

豫定の通り午前は五年生の實彈射擊。

山がゆるやかなスロープでのびて來てゐる、多分谷だらうが其處に設けられた射擊場に着いた。

太陽は輝やかしい顏を現はしてゐた。時計を見れば八時半銃の手入が終つて一度に六人づゝ射擊場に進んだ。射擊距離二百米。バチン、バチン、バチン……。

非常な速度で彈丸は飛出す。煙は濛々と立昇る。かねて學校でやつた狹窄射擊と違つて大分肩に反撞がある。でも痛快だ。バチンと云ふ音が音樂的に聞える。

太陽が西に廻るにつれて益々照り付ける。顏がほてる、射手の誰を見ても一生懸命。引鐵を引く時のあの心持、全精神が指の先に集まつてゐる。あの心持こそ吾等の生活に於て何時も心に留めて置くべきであらう。他の物は何も無い。目指す目標を除いては、何の音も聞えない。無我の感がある。

全部射擊を終つたのが正午前、班內で晝食後一時半營庭に整列。直ちに練兵場に向つて前進。廣々とした野原、廣漠とした北亞米利加の大平野を聯想する。

重機關銃、平射步兵砲、曲射步兵砲の說明を將校から聞き、我が陸軍の精銳武器に信賴を置いた。平射步兵砲は隨分と重く約二十四貫ある由。あれを四人で運ぶ兵卒の勞苦が察せられた。兵卒達の戰鬪動作、体の何處にも精氣が滿ち〳〵てゐた。天空を仰ぎ見れば、走るわ〳〵黑雲が、此の地上を蔽ひかくさうとして黑雲は增す。今朝の晴々しい太陽も雲の上に姿をかくした。天候はます〳〵險惡となつた。

飯盒炊爨だ。雨がやつて來た。黑雲はいよ〳〵はげしく走る。龍が下らんばかりの空。

御飯の出來る頃には天も察してか小雨となつた。溫い飯盒

の飯に舌鼓を打つた。

いよ〳〵待ちに待つた夜間演習だ。

雨は再び降りしきる。秋の夕闇は次第に何處からともなく匍ひ寄る。あつ山を包んでしまつた。魔の手の樣に靜かにのびて來る。雲間を破る電光の閃き、おゝ自然の探照燈だ。自然の砲火だ。パツトと云ふ音はしない。しないも道理、無限の砲口を持つ自然の砲臺の火だもの。砲彈は無盡藏だ。嘻！壯快々々。砲火が閃めくと周圍は赤々と照らされる。雨は未だしん〳〵として降り續けてゐる。練兵場の東南練兵場を去る一千米のあたりを完全に占領した我が軍は練兵場の西端に陣取つた敵軍を夜襲するのだ。步哨線は一齊に張られた。斥候は放たれた。四圍は唯シイーンと靜まり返つてゐる。時々その靜かさを破る秋虫の聲。その聲を耳にすれば限りない。シベリヤの平野に心は飛ぶ。休はしまつて行く。士氣は鼓舞する。

步哨の報告には何等の異狀無しと云ふ。問査の聲も聞えない。斥候は一人も歸つてこない。敵の配備は更に不明。約二時間程は戰線異狀なしで過ぎた。

八時を過ぎる約小半時餘りの時、敵陣深く忍び寄つた斥候は某地點に於て敵の步哨線に引かゝつた事を告げた。敵は到る處に步哨線を張つて犬の子一匹ものがすまいと嚴重に警戒してゐるらしい。

戰期は熟した。味方は肌寒い秋風を受けて敵の狀況如何と監視の眼を敵陣地の方に向けてゐる。あたりは面憎いまで靜まり返つて淋しさを感じる程だ。斥候の報告はいよ〳〵急を告げる。吾軍は遂に敵陣向つて潛行する事となつた。時に九時前。意氣はまさにその頂點に達した。敵陣地前約五百米の所まで前進した。一擧に敵の中堅を衝かんとする魂膽である敵陣近く肉迫した。忽ち起る問査の聲「誰か、誰か、誰か」その聲は空しく秋空に木靈する。敵兵の打出す銃聲は轟く。銃口は火を吐く。

ガサ、ガサ、ガサ。吾軍の進む音は無氣味な音となつて空中に傳はる。更に進んで敵前百米「突キ込メ」中隊長の聲。おー、それこそ吾等が待ちに待つた聲なのだ。何で躊躇しようか。何の遲れるものか、突擊に、突擊……。

かくして吾等の樂しい夜間演習は首尾良く終りを告げた。直ちに營內に歸り就床。つかれてか勇敢な兵士達は程なく美しい佳境華胥の國へと旅をいそいだ。

兵營宿泊第三日（九月二十八日）

第五學年　泉　堯仁

昨二十七日の夜間演習の疲れで今朝は寢むくて仕方がないそれでも皆と一緒に寒い營庭で點呼を受ける。洗面所で二等卒がこれから使はうとして居た洗面器を使つて滅法どなられた。どんな時でも怒る時には、直ぐ「貴樣は何中隊だッ？」と問ふのが兵隊の癖らしい。簡單で大きく話すから、吾々學生は叱られてゐるのかと思ふ位だ。所謂これが軍隊式だ。

食事中でさへも、營庭からは、元氣な銃劍術の氣合が響いてくる。朝は靜かであるのが普通だが、此所では喧騒で、兵隊獨特の活潑さが充滿してゐる。その氣持が僕等の氣持に乘り移つて最初は黑くあぢなく思はれた麥飯が却つて味のあるおいしい食物となつた。

「今日は日曜だから呑氣だ」と田中一等卒が話してゐる。僕はこの人が班長かと思つて居た。しかし班長は軍曹なのださうだ。

午前九時營庭に集合して、空砲五發づゝ貰つて練兵場に向つた。戰鬪教練をするのだ、皆喜んでゐた。五發の彈丸を愼重に見計らつて都合のよい時に、敵――四年生――を射擊した。氣持の良い音が廣い練兵場に響き渡つていやが上にも緊張して、演習は終つた。それから上等兵に引率せられて各個教練を受ける。その上等兵は大變僕等を褒めてゐた。「現役兵より動作が上手だ。」と言つて居いてから「この調子が密集教練をしなくてはいかぬ」と注意をする。この教練は二十分程で終つた。隊に歸つて晝食。

午後一時、再び集合して練兵場に向つた。午前に引續き各個教練だ。今度は軍曹だ。伏射と散兵の動作。その軍曹はねち〳〵した言葉で、動作について注意をしたり、時々僕等を笑はす。實際、此所に來てからは、氣持良く笑つた事は滅多に無い。何時もびく〳〵して居た。そんなにびく〳〵する必要はないのであるが、只何となくのび〳〵しなかつた。各個教練を受けてゐる途中にだん〳〵と雲が下降し始めた。漸く野坂山の頂上を押し包んだ頃、あの嫌な雷が鳴き始めた。するどい電光、只さへ固くなつてゐる心は一層雷鳴でおの〻いた。しかし戰場に於ける大砲だと思つて、一心に夢中になつて伏射する。その中に黑雲から雨が降り始めた。刻一刻激し

くなる。ズボンが一滴毎に濡れて足にぴつたり食付く程にまでなつた。帽子も濕つてきた。眼鏡が曇るのには弱らされた。

「稀の日曜にえらい損をした。」と軍曹は濡れてゆく軍服を見ながら恨めしさうに言つて居る。それでも狩野少佐が見てゐるので熱心に教へて呉れる。練兵場の草葉は、ぽと〳〵だが軍曹は惜し氣もなく寐うちの姿勢をとつて一々注意をして呉れる。僕等もわい〳〵言ひながら河の中へつかる樣な氣持でやつた。シヤツも、とう〳〵濡れた樣だ。風邪を引くかも知れぬと心配しながらも、汗を出しつゝ一生懸命だ。餘り激しくなつて來たので、練兵場を引きあげて雪中演習場で、速歩の練習だ。ラッパの音に合はして行進する時は、疲れは消え去る。軍曹の號令で外に出て深呼吸をする。それから又速歩の練習。相當疲れた。休憩後營庭で分列式が行はれた。これが最後の教練だ。ラッパの響にしつくり合はして思ひきり歩いた。

夜になつて不寐番の順序が告げられた。眞夜中に當つた者はぐちを言つてゐる。點呼が濟んで一寐入りしたと思つたら早速起されて、震へながら兵隊さんと二人で歩きまはる。隨分寐癖の悪い兵隊さんもゐる。僕の相手の兵隊さんは、時々僕に話しかけるが、何を言つてゐるのか少しも判らぬ。それでも時々相槌うつて返事をする。十時半から十一時半までの一時間もさうしてゐる中に過ぎて仕舞つた。歸つて又窮屈な寐臺にもぐり込んだ。明日は除隊だ。嬉しい。皆嬉しいと言つて居た。只何となく家に歸りたかつた。規律で包まれた窮屈な生活だからかも知れない。しかし僕等を、矢張り學生として取扱つて呉れなかつたので、想像して居たよりも氣樂であつた。その上僕等の班の人達は皆温和しい人達で、大變親切であつた。只困つたのは言葉の聞き取れぬ事だ。時には全然何の意味か判らない時もあつた。要するに軍隊では初年兵が一番つらく、二年兵になると餘程氣樂らしい。階級問題のきびしい所で、かたい規律で一切をくゝつてゐる生活が軍隊生活だとも言ひ得やう。僕には、只の四日間では十分、軍隊の精神、樣子等がつかめなかつた。

敦賀兵營生活

第五學年　北川正明

劉喨たる起床喇叭。『起床。』と呼ぶ當番の聲。今まで靜かに

眠に就いてゐた兵營は一時に覺めて、朝の活動を始めた。外は眞暗らで劇しい雨の音さへ聞えて來る。日朝點呼は室內である。何時もならば何をおいてもまづ外へとび出さねばならぬところだ。それにしても今朝の雨は隨分皮肉な雨だ。『明日は嬉しい除隊日』などと友と語り合つたのも仇になつてしまつた。

點呼が終つて食事だ。さすがに三日間鍊へられただけあつて軍隊式に要領よく分配して食べて行く。今日は最後といふので、食器も一段と入念に洗はれた上、整頓せられて行く。しばらくすると週番下士が八時出發といふ命令をつたへる。この頃からあれ程劇しかつた雨もやみかけて次第に太陽の光さへ仰がれるやうになつた。

八時中隊前に整列する頃には、今朝の雨はどこへやら、わづかに名殘を營庭に殘すのみで、空には晴々とした秋の太陽が輝いてゐる。

いよ〳〵出發。二十六日から今二十九日まで四日間にわたる兵營生活を了へて、意氣揚々、凱旋軍のそれのごとく歸校の途に就いた。思ひ出の兵舍、印象深い練兵場、またうるはしい射擊場を後にする悲しみと、懐しの母校へ、樂しい父母の許へ歸つて行く喜とが友の面に混線してゐるやうだ。

思ひ出の粟野をあとに、母校こひし、父母こひしの一念に速い汽車も遲く思ひながら、柳瀨のトンネルを越れば、既に近江路に入り、右手に余吾湖を望み、賤ケ岳の古戰場に昔を今に偲びつゝ着けば米原。待つ間なく聯絡列車に乘込み、一走り彦根に着く。臼田先生がわざ〳〵御出迎へに來て下さつて、先づ我々の無事を喜んで下さる。

學校では諸先生をはじめ皆出迎へて下さる。

校庭で校長先生の御訓示をうけた。

訓示中に『諸子の軍隊生活に於て、體驗して得た良き智識を學校に於ける實際生活に充分發揮する樣に。』といはれた。

さうだ。我々は唯教練をせんが爲に、珍らしい軍隊內を見物しにわざ〳〵敦賀まで行つたのではない。我々は軍隊に於て教練の目的たる規律、服從、忍耐、節制等の諸德を、實際的に養成し、軍隊內に在る獨立自助といふ如き良習慣を得んがために行つたのである。若し我々がこの良き美點を軍隊內に於て、目の當り見て居ながらこれを實際的に學校生活に發揮しないならば何の目的で敦賀まで行つたのかわからぬことになる。我々は校長先生の御訓示に、今更ながらに發憤させら

れて益校風改善の責任の重きを思ひ、風紀の肅正に一段と奮起せねばならぬのを感ずるのである。

縣下聯合演習記

第五學年　大照　敏

大氣既に初冬の氣を漂らし霜漸く下らんとする十一月六日吾等四五年二百餘名は第一回縣下學生聯合演習に參加せり。縣下數千の精鋭馳參し剩へ軍隊の參加せる大規模の演習なれば吾等の覇氣既に凛々たり。

午前九時朝來の曇天をものかは彈丸兵糧を滿載し武裝嚴しく皖々たる行進喇叭を先に意氣揚々遠征の途に上りたり。

げに將來日本を背負ひ立つべき若人はかくあれかしと念じつゝさては出征軍人をまねびつゝ身を遠く旅順の要塞に運びたり。終始緊張の裡に北軍輸送列車は五箇莊驛に着きぬ。

八日市に程近き所なれば早くも飛行機の爆音吾等の耳を驚かしぬ。「總て飛行機は敵機と見做すべし。」之嚴命令なり。

すはやと計り慌てしも只今は情況外なり。

見れば大なる飛行機後に何か小さきものを曳けるあり。

或者は之を吹き流しを附けたる審判機、或者は小型模型飛行機と云ひ衆議區々たり。一同怪訝の中に突然その吹き流しが、下降を始め宙返り數遍悠々飛び去りぬ。之先の大なる戰鬪機、小なるは偵察機？ならん。一同顏を見合はせて苦笑せり。

かくて早くも兢々全軍の士氣益々昂じたり。

愛知川を徒涉し旋々迂回目的地に急ぎたり。

參加騎兵の勇姿も路上所々に見受けぬ。「來たぞ」誰か囁きぬ。吾等はいよ〳〵身引き緊るを覺ゆ。時既に正午近くなれば用意の辨當を一同貪りぬ。

午後一時いよ〳〵情況開始なれば杉原少佐殿の重々しき。命令一下一同目指す敵を殄滅せん爲八日市飛行場東端に、攻擊前進を起したり。吾が第三小隊の一部は已に愛知川方面に至り。時に午後二時前、殷々たる野砲山砲の轟き吾等の帽を吹き飛ばし耳をも聾せん計りなり。

自轉車傳令の活躍騎兵の馳驅あたりは一大戰禍の巷と化しぬ。先づ愛知川會戰あり。敵は主力の一部を以て吾が北軍の前進を妨げんとせり。第三小隊の一部第一小隊先づ之と交へ

奮戰一番、勇敢なる敵を退散させり。聞く所によれば金鵄勳章を受けるが如きもの輩出せりと。

吾等は悠然と愛知川を渡り漸く飛行場に到着しぬ。荒涼たる中原を思はせる大飛行場の白煙の彼方敵の散兵は、緩々蟻の行列の如き横線を引けり。吾等も又之と敵對すべく、散開し最後の決戰に進みぬ。小銃の音機關銃の連發それに次ぐ、躍進又躍進。吾等の胸は躍りぬ。

かくて午後三時半最後の突擊に進める龍虎の如く飛びつきぬ。喚聲呼應天地鳴動しげにも一大修羅場なりき。

短き冬の太陽既に西の空を染め勇壯なる激戰の跡を事もなく照らぬ。かくて演習第一日は終りを告げぬ。

全縣下中等學校聯合演習

第五學年　泉泉　堯　仁

秋こそ吾等若人の獨占舞臺である。澄み切つた蒼空に筋肉の躍動を感じ、眞紅な紅葉に意氣の燃燒を覺える。この秋酣はなる十一月六・七兩日、御親閲記念の全縣下中等學校聯合演習が催された。

戰機正に熟した六日午前九時、參加總員二千五百名の湖國健兒が、八日市飛行場を中心に南(黑)、北(白)兩軍に分れ、南軍は

北軍は小川少佐指揮の下に戰鬪行動に入つた。

北軍第　大隊に編成せられた吾等は、六日午前九時半彦根驛を出發し、電車輸送を以て八日市に向つた。十時頃五ケ莊驛に下車し、愛知川を渡つて豐國村で休憩し、晝食を濟ませた。晝食後八日市に向つて前進した。今日の彦中赤鬼健兒は一層元氣な勇士であり、初陣の誇りに輝く若武者だつた。兎角遊戯的になり、易い演習も、今日は歩一歩實戰地に近付く樣な眞劍味が溢れてゐる。輝く眼には演習の光景が映されてゐるが、蒼空には、絶えず敵が吾等を見下してゐる。しかし敵に恐れる吾等でない。心には勇往邁進の意氣天を衝くの慨があり、本校獨自の「赤鬼魂」が全軍に溢れてゐる。行軍すれば眼前には死屍累々たる二百三高地が展開される。

進んで行く中に、午後二時頃愛知川堤の側面に當つて、突如機關銃の響が耳を破つた。それと交互して小氣味よい小銃の音、はや前方部隊では敵と衝突したらしい。耳から頭から

喉からあらゆる所から身体の内部にその音がしみ込んで、心臟が男らしく活動し始めた。早く戰線に出たい、敵が打ちたい。敵が打ちたい。殺氣正に天地に充つ。銃聲を聞いて歩調が一層活潑だ。前進だ！　銃聲は、秋空に響き、若人の心臟に歡喜を味はしてゐるが、砲煙空を覆ひ、銃聲雷の如き戰場ならば、その銃聲が、どれ程人の心をえぐり、壽命を縮める事か。必ず人をして轉た荒涼の感を抱かしめ、征馬をして嘶くを止めしめる。

午後三時頃△△村近くまで來た時、砲兵が山砲を据ゑてゐるのを見た。その素速い活潑な動作に感心してゐる暇もあらせず、俄然一大爆音！　上りかけた右足は宙に浮いた儘、左足は地についた儘しばし其の動作を中止した。皆の顏がサツと驚きにたまげる。銃口の下つたのも氣付かずに後を見てゐるその顏は岡本一平の漫畫になりさうだ。その砲聲が空氣を傳つて、木と言はず家と言はず、總ての物にこだましつくして、やがては空に消え去つた。それに呼應して矢庭に敵の銃聲がつぶやき始めた。幸に我が軍には彈丸が飛來しない。性急な機關銃が途切れると、くすぶつた樣に小銃がさゝやく。だん〳〵と平和な村も喧騷な戰亂の煙塵に包まれてゆく。再び山砲が唸る。天地も破れよとばかり惡魔が叫ぶ。その叫びに負けじと前方一帶は銃聲が途絶えない。餘計に射ちたい。前進中止の時は、全く腕が鳴り、床尾板が幾つか小石を打ちくだいた。

愛知川の橋まで來ると銃聲は全く無い。橋の下には、水を渡つて、敗走する敵を追擊した勇悍な味方の部隊が、がや〳〵言つてゐる。多分輝く武功の自慢であらう。或は濡れたズボン・ゲートル・靴の不平を漏してゐるのかも知れない。

嵐の前の靜けさが續く。松林の中へ入つた時、味方の騎兵が勇ましく活躍してゐる。吾等に比べて氣の毒な程懸命である。走つて行つたかと思ふと戻つたり、馬は主人の手綱通り電光石火的に走驅してゐる。折しも、あの山砲が、がら〳〵と音をたてゝ走つて來た。馬も人も汗みどろになつて引張つて行く。その後から自轉車斥候が勢よく續く。やつとの事で飛行場に到着し、松林の中で休憩する。

小隊長が命令を下すや吾々は、分隊長の示す位置についた。前方遙かな所に點々と連なる敵兵。いざ來いとばかり速座に五發の彈丸をつめた。第二線にせられた僕等は、只ぢつとして盛に起こる銃聲に耳を借す。刻一刻敵影は大きくなる。最

早銃聲は一々區別し難い程ひゞく。タツタツタツ……。地響がして一擧に敵を薙ぎ倒さうとする機關銃。ビユンー。ビユンビユンー。死を豫報する樣な小銃の音。この平野も今や一大修羅の巷と化した。

「目標前方の散兵。六百打てッ！」突如銃聲を破つて分隊長の命令。息詰る樣な嬉しさで敵を睨んだ。照門と照星と敵とが一直線になつた瞬間、空氣は動搖して、パツと紫烟がたつ。實に小銃の音は、憂愁を一掃し解悟の境に踏み込ましめるものである。汗ばんだ食指がぐつと曲がると、指揮刀ひらめかしてゐる敵の小隊長が、天晴れ名譽の戰死をとげてゐる。銃口に觸れてゐる草が眞二つに裂けたかと、思ふと虛空をつかんで一人の敵が冷たく倒れる。こんな光景が實際展開されたら、如何に多くの涙のシーンが作り出されるであらう。

ドツドツドツ……ドツドツドツ……。機關銃は敵が進んだと見るや、猛烈なる射擊を始める。今や全く飛行場は音と音との交錯點である。銃聲は男性美活躍の伴奏である、白兵戰の序曲である。彼我共に相接近して、既に銃口には劍が光つてゐる。決戰だ！死だ！　小隊長の刀先一度空に弧を畫けば逆しり出る「突擊に進メツ！」走つた、息も切れよ、足も折れよと走つた。眼に映つるは、劍尖と敵だ。「だ突込めッ!!!」絕叫に合はせて起る突貫のひゞき。「ワツ！　ワツ！」「ワツ！　ワツ！」あはや肉彈戰に移らんとした時、劉曉と鳴り響く休戰ラツパ。敵も味方も仲良く矛を收めて微笑を交はした。時は丁度午後五時頃。

これば一先づ演習は中止となつた。兩軍とも後方に退却した。吾等は「　　」と云ふ村まで退ぞいて、其所の宮の境內で露營する事になつた。愛知川がすぐ後にあるので、其所で飯盒炊事をし、夕食を濟ませた。午後十時までは演習狀況外にあるので、炊事の後火で暖をとりつゝ、月光を賞したり、四方山の話に過した。十時に境內に集まつて、三ケ所に置かれた炭火のまはりに集まつて、寒夜を談笑に耽つてゐる中に、十二時近くになつた。集合命令が下つて、炭火に別れを惜しみつゝ隊伍の人となつた。月は高く上つて吾等の進むべき道を照らして呉れる。しかし其の青白い光は、冷たくて無情である。短かくうつゝた路上の影までも凍死しさうな冷たい夜氣がひた〳〵と押し寄せて來る。心持靴音さへも冷たい。

飛行場に到着して晝と同じく松林の中に引き入れられた。腰を下さうと思つて探ぐつて見ると、一面しつとりと夜露が

降りてゐる。これには弱つた。靴の底から凍つた松の落葉がちく〳〵と刺す樣に、寒氣が滲込んで來る。友人の顏も見えない程の林だが、時々梢の間からさし込む月の光で、露が玉に見える。月の光と、靜寂と寒氣より外に何物も存在しない夜である。眼前には廣い飛行場が横たはつてゐるのだが、月に光つたもやで蔽はれて見通しがつかない。恰も無限の大平原だ。

七日午前三時頃に、夜襲の命令が下つた。夜襲は無言の戰である。只默々として、露の中を進んでいつた。靴は、既に水に浸つた樣だ。時々流星が尾をひく。俄然もやの中に點々と火が見えた瞬間、銃聲によつて靜寂は引裂かれた。敵は激しく射擊するが、吾等は無言で進んでゆく。敵は遂に吾等の無言夜襲を感付いたのだ。一旦露の中に臥して、逆襲して來た敵軍が眼前に來た時、起上つてその敵と對抗した。「突込め！」の號令は下つても聲を出さずに突擊だ。夜襲はかくして無言より無言に終つた再び元の位置に歸つた。

其所に歸るや、直ちに吾等は林に沿つて、拂曉戰に備へるべく傾き始めた月に光る露路を分けて行軍を續け、暫くして又もや、冷氣溢るゝ林中に入れられた。月が傾いて行くにつれて露がだん〳〵と霜に變つてゆく。帽子も洋服も冷たく濕つてゐる。堪まらなくなつてマントを布いて横になつたが、不相變靴から侵入する夜氣の冷たさに身震ひをする。今迄冴えてゐた眼瞼が重くなつて、時折、魂が拔けた樣に眠つたり何かのはずみで魂が立ち戻つたりして居た。

斥候の報告によつて、敵を打たんとして、進んでいつたが一人の敵も見ずして空しく歸つた。第二回目の夜襲は徒勞に終つた。益々冷氣は增して來て東の空が明らむ頃は、その窮極に達した。睡眠不足が一層身体を冷たくした。月が西山に近付き太陽が顏をのぞき始めた。昨夜一晩無情な眞黑の木や葉は、本性の純然たる植物に立ち返つた。飛行場一面に擴がつて居たもやが薄らぎ始めると、青草であるべきのが、眞白の霜原と化して居る。命令下るや拂曉戰の幕は切つて落された。霜柱を踏倒して進む姿は、勇壯そのものである。

寐打ちをする時の、霜の上になる冷たさとその心持は到底心に徹しても口に言ひ得ぬ事だ。指の先にくつ附いた霜が解けて行く時、指全体から感覺までも奪つてゆく。敵と接近する事二百米程となる頃の射擊は、全く指は機械的に動いてゐるに過ぎなかつた。寐る度に白く附き、起きる度に解ける霜を

此の時程冷酷なものだと思つた時はない。拂曉戰は見る人をして壯觀にせしむるもので、あづかる兵士必ずしも、自身では壯觀を感じない。

著劍して、突貫の喊聲を思ひきり張り上げて突進して行つた。二千五百人の湖國健兒達の意氣は喊聲となり、喊聲は秋の霜空をゆるがし、大地を震はせた。ラツパの音ほがらかに鳴渡るや此所に二日に渡る意義ある演習は終を告げた。今から思へば昨夜の寒冷が夢の世界に思はれる。時は午前七時霜もやうやう解けゆく頃である。

飯盒の中で、昨夜の冷氣で、凍つた飯で朝食を濟ませた。休憩後九時頃から、知事の閲團があり、續いて分列式が行はれた。行進に活潑な歩調で歩む健兒には、一點の演習の疲れも見えず、國家を双肩に荷ふべき餘悠綽々たる元氣が溢れてゐた。

知事縣會議長等の訓辭祝辭があつて　天皇陛下の萬歳を三唱して全く總ては終つた。

× × ×

便り

母校の諸君へ

彦根高商より　組田重嘉

憧れの彦中生となつたのはもう六年近くの昔――僕にも回顧すべき中學生活の歴史がある樣になつた。卒業はしたものの僕の樣に彦根の土地に居る者には毎日元氣さうな愉快さうな朗かな諸君を見掛けるのでまだ彦中生である樣な氣がしてゐる。たまに學校を訪れても控所と云ひ廊下と云ひ職員室と云ひ僕の知れる所と少しも變りなく毎日中學校へ通學してゐる樣な氣がしてならない。眼にとまるすべてのものは五ケ年の追憶を呼び起すに充分なものであり、校庭の大銀杏、玄關前の蘇鐵、櫻……みんな時と云ふ甘やかかな層を通して懐しく呼びかけて來る。何と云つても一番樂しいのは中學時代だと此の頃痛感してゐる。天眞爛漫な純眞そのものの如き少年の心を健やかに育ぐみつゝ學友と共に學んだり遊んだりする幸福は經驗なくしては想像出來ぬだらう。世の荒波も社會の魔手も及ばなかつた。美しく澄み渡つた秋晴の午後、大きな石垣の間を縫つてクラシカルな京橋の上へ續々とこぼれて

來られる諸君の樣子は實に平和な幸福の極致以外のものではない。併し此の樂園にも卒業期には焦燥と憂慮と不安が訪れた。不如意の金看板を提げた社會の内部へ各々目指す目的に向つて雄々しくスローガンを揚げて突進したものの今はその九十三名の騎士は如何なつてゐるであらう。東に西に、北に南に、別れた友は如何してゐるだらう。

僕達卒業生に取つて最も嬉しい事の一つは母校の名聲のあがる事である。殊に校友會各部の諸君の努力によつて勝ち得た名譽は僕に取つては大變な誇で遠來の級友をとらまへて大いに彦中の赤鬼魂は吹いて氣焔を揚げる事が出來る。中等學校の運動記事が新聞にあると一番に母校は？と考へる。高商で各部とも中等學校の大會を行ふがその各々に於て彦中が斷然押さへる日が來たらどんなに愉快だらうと微笑まずにはゐられない。全國に數年君臨した端艇部の意氣――それが彦中にはあるべき筈だ。

こんな事書きかけるときりがないがもうよして此を書けと言はれたそも〳〵の目的だつた彦根高商の樣子を少し書いてみよう。

先づ位置を考へてみると田舍にあるのでそれによる不利と利益がある。不利と云ふのは刺戟が少なく新しきものに接する機會が少ないため注意を怠ると時勢に遲れ所謂社會戰の尖端に立ち得ず現代の活社會を理解する事が出來ない事である。利益と云ふのはもの靜かな城下町であるので勉强の妨が少なく輕薄をさけ眞面目に暮らす事が出來る事等である。一利一害で都市必ずしも可ならず田舍必ずしも可ならずである。併し時勢におくれる事に對しては雜誌新聞等を注意する事によりある程度まで之を防ぎ避ける事が出來る。都會の塵芥を浴び又混つた空氣を吸つて喧噪の中に暮らし健康破壞の危險に自らを曝らすより、城と湖の彦根でのんびり暮らして來るべき社會への挑戰のために充分な体力と智能を培ふ事もいゝだらう。次に高商と云ふと一口に馬鹿にされる事が多いがそれはむしろ云ふ方が馬鹿だ。之は斷じて自己辯護ではないが商業なるものは人間生活の一つの重大な要素である事は云ふまでもない。驚異的魔力を以つて進展した資本主義の時代にあつて經濟界のアウトラインを知る事なくしては何物を論ずる事も不可能だと言つてもいゝ位である。資本企業の威力や行詰れる社會のどん底にあへぐ失業者群を等閑にするなら現代人としては失格者だ。一國の興廢も國民の幸不幸も現

今の日本は財界にかかる所極めて大である。商業は單に營利のみを目標とする金利政策ではない。需給の調和により過不足を補ひ人間の生活を幸福へ導く上に重大な機能を有してゐる。攻利的商業のみが商業であるなら社會は自滅するより他に仕方がない。この意味に於て商業は決して卑しいものではない。輕蔑されるべきものではない。商業は神聖な社會的分業の一であり得る。之を究める商業學は他の諸科學に對立し得る獨立した經營經濟學である。――理窟に墮した事を御詫びする。だが愚かな英雄主義やエゴイズムからではなく書いた事を信じて頂きたい。必然的に强要された認識である事を。――

× × ×

無限の世界より無限の世界へと果てしなく歩を續ける自然の姿。今や彼女は秋の宿場に辿りつき一年の收穫を精算して冬眠の豫防線を張らうとしてゐる。

黄金の波打つ平原の垂穗、其處から來る豊穣なみのりの秋。

高く高く天の奥まで澄んだ透徹の秋。

高い梢に黄色い斑點と紅の汚をつける秋。

いやそれよりも軒邊に虫すだく秋のデリカンー。

絶えんとしつゝ續く秋のもの靜かな交響樂か、纖細なメロディーに終らうとしてゐる。ソロの餘韻に似たリズムが見えざる聞えざる音樂を人の心に奏でる。その陶醉狀態のまゝ次の季節への推移が許されるなら人は或はあまりにも甘き阿片の痺痺作用をなめすぎ倦怠と怠惰を起すかも知れない。

だが峻烈の冬がある。冬は排擊すべきでない。粗雜な白材に成育するのみにては良材になり得ぬ。緊張稠密な赤材がなければならぬ。冬は休止ではない。冬は自己整備なのだ。

渺茫廣漠滿々たる琵琶の大湖。伏し仰ぐ伊吹の靈峰。

響く古城の鐘の神秘。――それ等の靈感を身に受けて彦中健兒よ振へと僕は祈つてゐる。（うすら寒き秋の夜）

晩春早曉小記

特別會員　大和田清朗

孫兒敲枕老爺驚醒東天既潮紅即起汲井泉淨身端坐擁孫兒于南緣恭賓出日曉露未乾萬象悉活亭々泰山（庭内有大樹稱泰山木）葉々帶玉翠緣如滴屋角藤樹垂聯珠紫雪凝不散蜂蝶醉花芬飛亂舞小禽安閑靜弄竹陰于妙曲吁此天地正大之氣惠與萬物千古無更豈不偉乎恍惚久之卒然顧我身全身既浴陽光臭骸不可見悚然再拜東天撫孫兒就朝餐云爾

部報

柔道部々報

部員　藤村正三記

部長　笠井先生
理事　村山先生
部員
五年　藤村正三　竹林紀夫
大照　敏
四年　村川文男　近藤國藏
三年　山口隆爾　柴田正己
大西三良　吉川實乘
二年　橋本末藏　北村辰夫
上田敏夫　岡野貞雄
丸岡芳行　佐野年久
一年　上池芳三　堀睦男
石橋靖弘　北野顯龍
竹村正司　多留良信

遠山の雪解け初むる春の初め、人は凡て陶醉する陽春より部員一同は萬物を燒き盡す酷烈の炎暑をものともせず、練習に練習を重ね烈しい氣合は堂を動し、精神は肉體と融合し而して一致し然る後吾等は更に一歩々々と其の妙技を窮め、未だ嘗て此れを等閑にせず。吾等は青春の伸び行く力と意氣を以て本校の爲めに日頃鳴る腕を試めすべく時機の到來を鶴首して待つのみ。

採點試合

昭和五年五月二十六日
高商主催第二回彦根中等學校聯合對高商柔道大會參加の記

聯合軍		高商軍
先鋒	藤本（商） ×	安藤
山口（中）	×	江田
吉川（工）	×	中島
西田（商）	―	中田○
近藤（中）	―	中居○
谷澤（工）	×	森本